

＋ 3 2 【だだら】

たまに【まるのみおんな】に出会うと、【まるのみおんな】のお腹にいる完ちゃんに、必ず声をかけます。

「おうい、かんちゃん、げんきにしとるかい」

完ちゃんからも、必ず返答があります。

「あいよ、金ちゃん、げんきだよ。ここは暑くもなく寒くもなくで、毎日春じゃ。食べ物も旨いぞ。それに何よりも、落ちついて勉強ができるからう。出たときには金ちゃんよりも、ずっとかしこくなつとるからな」

「そいつは、たのしみじゃのう」

「でもさ、ここはともだちがいないから、それだけが淋しいんじゃ」

「そうかい。でもわしは、いつもいつでもいつまでも、かんちゃんのもだちじゃぞ」

「ありがとうありがとう。眠るといつも金ちゃんの夢をみるぞ。だからほんとうは淋しくなんかないんじゃ」

「そうかい。たっしやでくらせ」

「金ちゃんものう」

ぼくは、【まるのみおんな】の御機嫌（ごきげん）をとるために、中川で釣った魚や、大山で狩った小動物をぜんぶあげます。

【まるのみおんな】は喜んで、魚や小動物をまるのみします。

その魚や小動物は、完ちゃんの御馳走（ごちそう）になるはずですが。

というわけで、【まるのみおんな】に会いそうなときには、中川に釣に行くか大山に狩に行くことにしています。

とくに夏休みは毎日釣に行きました。

釣竿や玉浮きは手作りですが、村長さんの家に寄って白子（しらす）をもらって、餌釣（えさづり）をやるのです。

中川の上流に行くと〈鮎禁漁〉の立て札が立っています。

ぼくはその禁の字の上に、大の字を書いた紙を貼付けてから精をだします。

餌の白子を十尾ほど口でかみくだき、川の水を口に含んで、いっしょに川面（かわも）に吐きだすのです。

鮠（はや）や山女（やまめ）もまちがって釣れますが、ほとんど毎日鮠大漁です。

尤（もつと）もいくら大漁でも、我が家の食卓にはでません。

自分が食べるためではなく、完ちゃんが食べるために釣っているのですから。

なぜならぼくは元々、釣りとか狩とかが好きではありません。

鮠であれ、兎であれ、生き物を釣ったり狩ったりするのは厭だ。

ですから、完ちゃんが【まるのみおんな】のお腹からでてきたときには、釣も狩も完全にやめています。

ある日あるとき、大山に狩に行きました。

ぼくの狩道具は、自分で作った弓矢です。

百発百中というわけにはいきませんが、どういうわけか専門の狩人よりも巧い。

おそらくこういうことは、訓練して巧くなるものではなく、得意不得意とか、資質とかがあるのでしょう。

たぶん剣術なんかもそうで、ぼくはちゃんばらごっこでも負けたことはない。

これは自慢でない、というのは、狩とちゃんばらの他はぜんぶ完ちゃんに勝ったことがないのですから。

完ちゃんは器用で、釘刺し合戦とか、めんこ合戦とか、木登り競争とか、川泳ぎ競争とか、そういうもので完ちゃんに勝つこどもはいませんでした。

それはさておき、大山に狩に行った話です。

うまい具合に、【まるのみおんな】が、いえ完ちゃんが喜びそうな、うまそうな子鹿を見つけました。

よし、と矢をつがえると、その子鹿のほうから駈（か）けてきて、ぼくに声をかけてくるのです。

「金ちゃんであるな。最近山や川を荒らしている金ちゃんであるな」

とても厳かな声でした。

「わしはきんちゃんだが、おまえはなにものじゃ」

「おれは子鹿のなりをしておるが、本当の正体はこの山のあるじ、【だだら】であるぞよ」

やはり厳かな声でした。

もしかすると本当に、大山の主の山神さまかもしれない。

それでも後へ引くわけにはいかない。

「【だだら】とは、へんななまえじゃのう」

「余計なお世話であるよ。おれは金ちゃんなんかには狩られはせん。喰われはせん」

「わしがくうんじゃねえ。ともだちのかんちゃんがくうんじゃ」

「なるほど、【まるのみおんな】の腹のなかにいる完ちゃんであるか。おれは完ちゃんにも喰われはせんぞよ」

「そうだをこねんで、かられろや、くわれろや」

「そうよな。勝負をして、おれに勝ったら勝手にしていいぞよ」

面白そうだ。

「よし、のったぞ。しょうぶするかのう」

そういうと【だだら】は、鹿なのに馬みたいに笑って、

「おれに勝てるわけもあるまいが、それでもやってみるかや」

「やったるで」

「ただし、おれがかんがえた勝負にかぎるぞよ。三度やって、金ちゃんが一度でも勝ったら、勝手にするがいいぞよ」

「それでええ、まけるもんかい。かってにさせてもらうからのう」

ちゃんばらならいいなとおもいながら、安請（やすうけ）け合いをしたぼくが馬鹿でした。

最初の勝負はこういうものでした。

「何分息をとめていられるか。むろん長かったほうが勝ちだぞよ」

これは苦手だがしかたない。

案の定（あんのじょう）ぼく一分、【だだら】十分で完敗。

次の勝負はこういうものでした。

「三分間で何回おならができるか。むろん多かったほうが勝ちだぞよ」

これなら自信がある。

だからふんばりましたが、ぼく五回、【だだら】五十回で完敗。

最後の勝負はこういうものでした。

「鼻の穴に何個どんぐりを詰め込むことができるか。むろん多いほうが勝ちだぞよ」

これも自信がある。

子鹿の鼻の穴より、ぼくの鼻の穴のほうが大きいし。

けれども予想に反して、ぼく七個、【だだら】七十個。

「まけた。はがたたん、はなもたたん。しかにまけるたあなさけない、しかたない。わしはひきあげるからのう」

ぼくは潔く完敗をみとめました。

【だだら】は、鹿なのに馬みたいに笑って、

「おまけに、もう一勝負やってもいいぞよ」

気が進まなかったが、ぼくはうなづきました。

「これからおれがうんこをするから、そのうんこの色を当ててるのだ。むろん中間色はなしでいいぞよ。そうよな、次の色から選んでもらうことにするかな。

赤、

青、

黄、

緑、

橙、

桃、

茶、

紫、

黒、

白、

以上十色だぞよ」

ぼくはあてずっぽうで、というより、鹿がだめなら、代わりに完ちゃんに桃を食べさせてあげたくなったので、

「ももいろじゃ」

と即答しました。

【だだら】の顔が梅干しみみたいに萎（しぼ）んで、ときを待たずに、うんこをしました。

桃色でした。

【だだら】は、情けない顔をして、

「ちくしょうめ、蛇足だったなあ、くそつたれ、約束だから、さっさと狩れや」

と呟きました。

ちっとも厳かな声ではありませんでした。

ぼくは悄気（しょげ）ている【だだら】を残し、桃をいくつかもいで引き上げました。

【だだら】は、おそらくぼくにきこえるよう、大山ぜんぶを揺らすほどの大音声（だいおんじょう）で、感謝の歌を歌っていました。

駄駄羅だらだら
あんがとさんよ
駄駄羅くわねで
あんがとさんよ
駄駄羅だらだら
だらだらあそび
駄駄羅だらだら
あそびましょう
くだらぬあそび
それいちばんね
駄駄羅だらだら
だらだらあそび
あすもだらだら
あそびましょう
駄駄羅だらだら
駄駄羅とともに
あそびせんとや
うまれけんとか
それなら駄駄羅
やっぱり駄駄羅
ほんまに駄駄羅
たのしや駄駄羅
おまけに駄駄羅

懐爺に【だだら】の話をする、話の結末（けつまつ）について、

「それはよかったですね」

といました。

「よかったのかのう」

「よかったですよ。【だだら】を【まるのみおんな】に吞ませてはいけません。おばけにおばけを食べさせることは、人間に人間を食べさせることと、まったく同じ次元（じげん）のことですからねえ」